第３章　鬼が主人公！日本各地のあまんじゃく昔話②

◆うりこ姫とあまのじゃく

【あらすじ】

“むかし、むかし。

じいさまとばあさまがあったと。子どもがいないのがさびしくて、

「子どもがほしい、ほしい」といいくらしておった。

ある日のこと、じいさまは山へたきぎをとりに、ばあさまは川へあらいものにいったと。ばあさまがあらいものをしていると、川上から、大きなうりが、

つんぶく、かんぶく

つんぶく、かんぶく

ながれてきた。ばあさまは、そのうりが、まあず、みごとなもので、

おらえのたからなら　こっちさこう

むこうのいえのたからなら　あっちさいけ

とうたったそうな。するとうりは、

つんぶく、かんぶく

つんぶく、かんぶく

ばあさまのほうへよってきたから、さあ、ばあさまはよろこんで、かかえて家にもどったそうな。やがて、じいさまも山からかえってきた。

「うまそうなうりがあるから。」

「ほう、こりゃみごとだ。さっそく、わってくうべ。」

じいさまが、ほうちょうもってわろうとすると、うりはひとりでにわれて、中からめんこい女の子が、ぺろっと生まれたそうな。

じいさまとばあさまは、たまげるやら、うれしいやら。

「おらたちが、子どもほしい、子どももほしいといってたもんで、こりゃ、さずかった子だべし。」

「んだ、んだ。まずめんこい子だと。うりから生まれたんで、うりこ姫と名まえつけるべ。」

そうはなしあったと。

うりこ姫は、みるまに、ずんずん大きなって、うつくしいむすめになったそうな。ばあさまが、はたおりをおしえると、これがまた、なんともじょうずで、

とっきんかたり　きんかたり

くだこなくても　七ひろ八ひろ

とっきんかたり　きんかたり
と、いい音をさせて、まいにちはたをおっていた。
そのうちに、うりこ姫があまりうつくしいもので、
「うりこ姫を、ぜひ、おらとこの嫁にけろ。」
と、東の長者様から、嫁もらいにきたそうな。
じいさまとばあさまはよろこんで、町へ、赤いきれいな、嫁入り衣装をかいにいくことにした。
「うりこ姫、うりこ姫、ひとりでいるとあまのじゃくというわるい鬼が、山からくるかもしれね。だから、どんなことあっても、おらたちがかえるまで、戸をあけてはだめだど。あまのじゃくは、つめがながくて、こわいよ。」
じいさまとばあさまは、よくよくうりこ姫にいってきかせ、そこらをしっかり戸じまりして町へでかけていった。
そこで、うりこ姫はまた、
とっきんかたり　きんかたり
くだこなくても　七ひろ八ひろ
とっきんかたり　きんかたり
と、はたをおっていたそうな。
しばらくすると、あまのじゃくがやってきた。とんとんとん。
「うりこ姫、おらと遊ぶべや。」
「だめ、だれもいないからあけられない。」
「そんなら、ほんのちょっとでいいから。」
「だって、けっして戸をあけてはいけないって、いわれてるもの。」
「んだら、ちょっと、つめのあかほどでいいから、な、な。」
うりこ姫は、あんまり、あまのじゃくがたのむもので、なんだかもう、いやといえなくなってきた。そこで、
「なら、ちびっとだよ。」
といって、ちょっとすきまをつくったと。するとあまのじゃくは、それっとばかり、ながいつめをひっかけて、がらがらっとはいってきた。
「うりこ姫や、西の長物さまのももばたけに、ももぎにいくべ。」
「だって、おじいさんやおばあさんにおこられるもの。」
「だから、るすのまに、ちびっといってくればいいだねか。いま見てきたども、まっかにうれたものばかり。あれもいでかぶりつけば、あまいしる、ぽたぽたっと落ちるべな。ああ、うめやあ。おもっただけでものどがなる。さ、いくべ、いくべ。げたはいていくべえ。」
「だども、げたはいていけば、からんこからんこなるもの。」

「だば、ぞうりはいていけばいい。」
「ぞうりはいていけば、ぽんぽんなるもの。」
「それならおれが、おぶってくれら。」
「おまえのせなかに、とげあるもん。いたくておぶされね。」
「なら、桶にはいれ。おれが、桶ごとおぶってく。」
うりこひめは、しかたなく、あまのじゃくにおぶわれて、西の長者様のももばたけへいったそうな。
ところがあまのじゃくは、じぶんだけ、さっさと木にのぼって、赤いももをたべ、うりこ姫には、ひとつもくれない。うりこ姫はまちくたびれて、
「あまのじゃく、おらにもおくれ。」と声をかけた。
「ようし、いまやるど。」あまのじゃくは、虫くいのももをとって、
かりっとかじって　耳くそ　はなくそ　ぷっぷっぷ
と、きたないのばかり投げてよこしたと。
「こんなの、くわれない。」
「ようし、それならここまでこい。すきなだけ、たべほうだいだぞう。」
そこでうりこ姫が、木にのぼっていくと、あまのじゃくは、
「や、や、そっちはけら虫がいんど。こっちのももは虫くいだ、それ、そのさきに赤いのがある。もっとさきだ。それ、そのえだだ。」
と、声をかけ、どんどん上にのぼらせて、いきなりつかまえると、うりこ姫を木にしばりつけてしまったと。
そして、うりこ姫に化けて家にかえり、なにくわぬかおで、はたをおっておったと。それでもその音は、
どってんばだり　どんばたり　としかならなかった。
そこへじいさまとばあさまが、嫁入り衣装だの、うまいものだの、たくさんかってかえってきたそうな。
「あれ、はたの音がいつもとちがうが、なんとしたもんだ。」
と、くびをかしげながら戸をたたいて、
「うりこ姫や、かえったよ。」といった。するとおくから、
「はえい、はえい。」と、声がして、うりこ姫がでてきた。
「おんや、うちのうりこ姫は、ばかげに声をふとくなったが、かぜでもひいたか。」
じいさまとばあさまは、またくびをかしげながら、みやげのかしをだしたと。
するとどうだ。たべるわたべるわ、あとからあとから口にほうりこんで、ありったけ、ぺろぺろっとくってしまったそうな。だって、あまのじゃくだものねえ。
「はてな、いつもは、一つがやっとだに。」

と、くびをひねっていると、そこへ東の長者さまから、嫁むかえのかごがきたから、それそれと大さわぎになった。じいさまとばあさまは、にせのうりこ姫に赤い嫁入り衣装をきせ、かごに載せて出かけたそうな。しばらくいくと、

　うりこ姫ののるかごさ　あまのじゃくがのっていく　がお　がお　がお

と、からすがさわぎたてる。たまげて、かごをのぞいてみると、いつのまにやら、化けの皮がぺろっとはげて、あまのじゃくが口あけて、いねむりしておった。

　じいさまとばあさまは、なんてかんておこって、あまのじゃくをかや原じゅう、ひきまわした。かやの根もとは、それからあまのじゃくの血で赤いのだと。

　ももの木のうりこ姫は、えんえんないていたが、ようやくおろしてもらって、かおをあらって、赤い嫁入り衣装をきて、さてめでたく嫁入りしたそうな。“

（松谷みよ子作.(1972 年).『宇野重吉の語りきかせ日本の民話 2』. 風濤社より引用）

【解説・コメント】

1　この昔話は、瓜(うり)から生まれた女の子を主人公にしたもので、日本の東北地方から九州地方まで広く分布し、よく知られています。特に東北・北信越地方、中国地方、四国の香川県で多く集められています（日本昔話事典 p122)。

2　話の発端は、「桃太郎」とよく似ています。地域によって話の展開に違いがありますが、紹介した本の筋は、次のとおりです。

①　昔々、子どものいないじいさまとばあさまがいた。ばあさまが川で洗い物をしていると、瓜が流れてくる。その瓜から女の子が生まれ、美しく機織りの上手な娘に成長する。

③　長者から「嫁にほしい」との話があり、二人は町へ嫁入り衣装を買いに行くが、うりこ姫に「あまのじゃくという鬼が来ても戸を開けては駄目」と伝える。

④　あまのじゃくは、戸を開けまいとするうりこ姫に「爪ほどでいいから」と、戸を開けさせ、さらに、嫌がるうりこ姫に言葉巧みに桃を取りに行くことを承諾させる。

⑤　しかし、あまのじゃくは、うりこ姫には虫食いの桃しか投げて寄こさず、「ほしかったら木に登ってこい」と誘う。登ったうりこ姫は、木の上に縛りつけられてしまう。

⑥　あまのじゃくは、うりこ姫に化けて家で機を織るが、いつもの音と違う。長者から迎えがあり、嫁入りの道中、カラスが騒ぎたてる。かごをのぞくと、化けの皮がはがれたあまのじゃくが眠っている。

⑦　じいさまとばあさまは怒って、あまのじゃくを茅原(かやはら)中、引き回す。茅(かや)の根元はそれ以来、あまのじゃくの血で赤いという。

⑧　桃の木のうりこ姫は、降ろしてもらい、顔を洗ってめでたく嫁入りをした。

地域によって、「桃」ではなく「柿」、うりこ姫は「木に縛り付けられる」 のではなく「殺されて食べられる」、天邪鬼は「引き回される」のではなく「引き裂かれる」、天邪鬼の血で赤くなったのは「茅の根」ではなく「蕎麦(そば)の根」など、さまざまです。

ただ、話の最後は「●●の植物の根が赤いのは、そのとき、流れ出た天邪鬼の血のせい」という、謂われ話で終わるのは同じです。

蕎麦

茅

3　うりこ姫の話は、江戸時代後期の風俗の百科事典といわれる「嬉遊笑覧（きゆうしょうらん）」（当時の随筆作家　喜多村信節（のぶよ）著）の中にも登場します。

「（前略）ある時、庭の樹に鳥の声がして（中略）老夫婦は、あやしいと思い、うりこ姫の部屋に入ると、あまのじゃくがうりこ姫を縄で縛っていた。老夫婦は、うりこ姫を助け、反対にあまのじゃくを縛って、すすきの葉でもって引き切って殺した。今もすすきの葉のもとが赤く染まっているのはその血の痕である」という内容です。

4　「橋杭岩の伝説」で、天邪鬼について、①人の意見に逆らう　②人の心中を察する能力に優れている　③口まねや物まねなどによって人をだます　④最後には滅ぼされる、という特徴を挙げました。

今回、登場する天邪鬼も、うりこ姫の考えを聞こうともせず(①の関係)、言葉巧みに相手の隙につけ込んで自分の言うことを聞かせ(②の関係)、ついにはうりこ姫に化けて長者の所に嫁入りをしようとしたが(③の関係)、正体がばれて引き回される結末であり(④の関係)、すべての特徴を有するものといえます。

5　皆さんが聞いたことがあるうりこ姫の昔話はどんな話でしたか。